

栗東市埋蔵文化財調査報告

2002年度 年報



2004.3

栗東市教育委員会
(財)栗東市文化体育振興事業団

栗東市埋蔵文化財調査報告

2002年度 年報

2004.3

栗東市教育委員会

(財)栗東市文化体育振興事業団

表紙写真 (上) 十里遺跡
(下) 高野遺跡



新開西 3 号墳 須恵器棺出土状況



新開西 3 号墳出土 須恵器棺



岡遺跡 倉庫



下鈎東・蜂屋遺跡 土坑墓

例 言

1. 本書は、2002年（平成14）度の実施した普及啓発事業と埋蔵文化財調査の概要報告書である。

普及啓発事業は財団法人栗東市文化体育振興事業団と栗東市教育委員会（栗東歴史民俗博物館・栗東市出土文化財センター）が開催した。

埋蔵文化財調査にあたっては、滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東市教育委員会が主体となり財団法人栗東市文化体育振興事業団が実施した。なお、国庫補助事業および市事業は栗東市教育委員会が実施した。

2. 調査体制は以下のとおりである。

栗東市教育委員会	生涯学習課	課 長	金子 宗夫
	文化財保護係	係 長	清水 好洋
(財)栗東市文化体育振興事業団		副 係 長	松村 浩
		主任主事	嶋田 和美
		事務局長	鎌田 善隆
	文化財センター	事 務 長	平井 壽一
		主 査	近藤 広
		主 査	猿向 敏一
		主 査	佐伯 英樹
		主 査	雨森 智美

3. 埋蔵文化財調査報告中の調査位置図は、スケールを指定しているもの以外は、すべて5千分の1である。

4. 調査参加者

調 査 員	畑本 陽子	森 智美							
調査補助員	青木タキ子	石原 恵子	井上 恵子	井上 妙子	井上 良子	上田 和江			
	梅野 和生	大岡 道代	大島 洋己	太田 絵美	木下 政子	教野 妙子			
	国松 好子	久徳 良子	込山 直子	澤田八千代	谷口由香里	園田 菊江			
	竹村ヒロ子	千代 清美	辻井一二美	中井 好子	中山 佳絵	西田 宏江			
	馬場美紀子	堀部アキ子	森野 靖子	葉師川 恵	山路 久恵	横山 こと			
整 理 員	岩根 隆子	奥村美枝子	木村三津子	穴戸 貴子	南出 彩子				
	宮嶋八重美								

5. 本書の編集は佐伯が行い、埋蔵文化財調査報告の執筆は、各調査担当が行った。

目 次

巻頭カラー図版

例 言

目 次

事業報告	1
2002年度調査遺跡位置図	6
遺跡位置図	7
埋蔵文化財調査概要報告	
2002年度受託事業・市事業・国庫補助事業一覧表	9
1. 十里遺跡	10
2. 下鉤東・蜂屋遺跡	14
3. 小柿遺跡	24
4. 狐塚遺跡	26
5. 岡遺跡	29
6. 岡遺跡	30
7. 高野遺跡	32
8. 上砥山遺跡	36
9. 新開西古墳群	38

2002（平成14）年度 文化財センター事業報告

1. 調査事業（調査主体：栗東市教育委員会）

- 1) 現地調査事業 : 9件（埋蔵文化財調査概要報告参照）
- 2) 整理調査事業 : 2件
 - ・収蔵整理調査事業 1988年（昭和63）度調査分
 - ・霊仙寺遺跡発掘調査整理事業（滋賀県教育委員会からの委託事業）

2. 公表事業（栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団共催）

1) 現地説明会等の開催

*新開西古墳群現地説明会

日 時：12月7日（土）13：30

参加者：130名

*十里遺跡現地説明会

日 時：1月25日（土）13：30

参加者：141名

*高野遺跡現地見学会

日 時：3月11日（火）・3月12日（水）14：00

参加者：200名



新開西古墳群



十里遺跡

2) 刊行物

報告書『霊仙寺遺跡発掘調査報告書』

概 報『栗東市埋蔵文化財発掘調査 2001年度 年報』

概 報『1986年度栗東町埋蔵文化財発掘調査資料集』

図 録『古墳時代の装飾品－玉の美－』

冊 子『はっくつ2002－栗東市話題の発掘調査－』

3) 埋蔵文化財展（栗東歴史民俗博物館共催）

企 画 展『古墳時代の装飾品－玉の美－』

会 場：栗東歴史民俗博物館

日 時：2003年3月8日（土）～5月11日（日）

入 館 者：延べ 1,732名

内 容：和田古墳群出土装飾品と

国内遺跡出土渡来系遺物のうち特に玉を中心とした企画展示

4) 収蔵企画展(出土文化財センター1階 収蔵展示コーナー他)

『子ども考古学ルーム』

期 間: 4月27日(土)～10月28日(日)

『栗東の交通と官衙～物の往来・人の往来～』

期 間: 11月1日(金)～3月24日(月)

5) 調査速報・収蔵整理成果展(出土文化財センター2階 速報展示コーナー)

「辻遺跡の韓式系土器」 6月5日～9月2日

「夏休み考古学体験! 2002夏」 9月4日～10月28日

「狐塚遺跡発掘調査速報展」 10月30日～1月27日

「新開西古墳群発掘調査速報展」 1月29日～4月14日

内 容: 最新発掘調査成果の速報、収蔵整理成果の展示公開

3. 啓発活用事業(栗東市教育委員会・財団法人栗東市文化体育振興事業団共催)

1) 出土文化財センター入門講座

『子ども考古学自由研究クラブ-夏休み考古学体験! 2002夏-』

「弥生時代の生活体験コース」

会 場: 文化財センター、

日 時: 7月27日(土)・28日(日)、8月24日(土)・25日(日)

参 加 者: 延べ 56名

内 容: 土器作り、古代食の調理・試食

「発掘体験コース」

会 場: 下鈎東・蜂屋遺跡現地、文化財センター

日 時: 7月27日(土)、8月19日(月)～26日(月)

参 加 者: 延べ 70名

内 容: 遺跡の発掘調査、出土遺物の整理調査



土器づくり

2) 出土文化財センター講座

『栗東の交通と官衙～物の往来・人の往来～』

会 場: 文化財センター・文化財学習室

内 容: 11月16日(土)

「旧栗太郡内の道路についてー野路岡田遺跡の調査成果を中心にしてー」

岡田 雅人氏 草津市教育委員会

11月17日(日)

「栗東の交通と官衙」 雨森 智美 文体事業団

「古代近江の交通路」 内田 保之氏 (財)滋賀県文化財保護協会

参 加 者: 延べ 41名

3) 勾玉作り

会 場：文化財センター
日 時：4月27日(土)～10月27日(日)
参 加 者：延べ 394名
内 容：滑石製のオリジナル勾玉の製作



勾玉づくり

4) 出土文化財センター調査研究報告会

歴史フォーラム 『古代の装飾品からみた大陸文化』

会 場：栗東歴史民俗博物館研修室

日 時：2003年3月15日(土)

参 加 者：61名

内 容：「渡来系装飾品」をテーマにした講演とフォーラム

報告1「金属製装飾品にみる大陸の影響」

小池 寛氏 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

報告2「ガラス玉にみる大陸文化」

安永 周平氏 岡山県古代吉備文化財センター

報告3「渡来系の古墳にみる玉」

近藤 広 文体事業団

フォーラム

コーディネーター 花田 勝広氏 野洲町立歴史民俗資料館

5) 出土文化財センター教室

会 場：出土文化財センター・文化財学習室

日 時：随時(依頼による)

参 加 者：草津小学校	4/17	113名
葉山東小学校	5/8	67名
治田東小学校	4/24	68名
治田西小学校	5/16	74名
葉山小学校	5/23	74名
下鉤糠田井自治会	6/23	70名
古道を歩く会	10/4	30名
治田西小学校	10/18	32名
古道を歩く会	12/16	60名
レイカディアシニアサークル	12/20	20名
(財)枚方市文化財研究調査会	3/9	67名

内 容：火起こし、勾玉づくり体験学習、館内展示と市内遺跡の説明など

4. その他

1) 協力業務

「出土文化財センター管理運営業務への協力」

- (1) 施設および設備用品等の日常的管理業務への協力
- (2) 施設の公開業務への協力
- (3) 収蔵管理業務への協力

2) 職員派遣

講 師 (華頂短期大学)

日 時: 4月16日(火)～7月16日(火)、13回

派遣職員: 佐伯英樹

内 容: 風土と文化

調 査 (栗東歴史民俗博物館)

日 時: 5月7日(水)、8日(木)

派遣職員: 雨森智美・佐伯英樹

内 容: 六地藏竹中家鍛冶屋の調査(図面作成)

講 師 (葉山小学校)

日 時: 6月21日(金)、6月28日(金)

派遣職員: 近藤 広

内 容: 郷土の歴史探検クラブの活動指導

講 師 (草津市立玉川中学校)

日 時: 6月27日(木)、7月3日(水)、7月11日(木)

派遣職員: 雨森智美

内 容: 3学年選択社会科講師として

講 師 (草津市立玉川中学校)

日 時: 11月28日(木)、12月5日(木)

派遣職員: 雨森智美・近藤 広

内 容: 3学年選択社会科講師として

講 師 (愛知川町文化財講座)

日 時: 12月5日(木)

派遣職員: 雨森智美

内 容: 『近江の官衙』～道がむすぶ律令期の役所～

町史編さん (愛知川町史編さん室)

日 時: 2月19日(水)

派遣職員: 近藤 広

内 容: 愛知川町史編さん事前会議

発 表 (平成14年度滋賀県発掘調査成果報告会)

日 時: 3月15日 (土)

派遣職員: 佐伯英樹

内 容: 新開西古墳群の調査成果

3) 職員研修

職員・臨時職員研修

日 時: 2002年11月19日 (火)

内 容: 滋賀県立安土城考古博物館 (滋賀県蒲生郡安土町)

船来山古墳群・古墳と柿の館 (岐阜県本巣郡糸貫町) の見学

参 加 者: 主査4名、調査員1名、調査補助員30名、整理員6名

全国公立埋蔵文化財センター連絡協議会第15回研修会

日 時: 2002年10月24日 (木)・25日 (金)

場 所: 秋田県鹿角市

内 容: 環状列石の調査とその保存活用

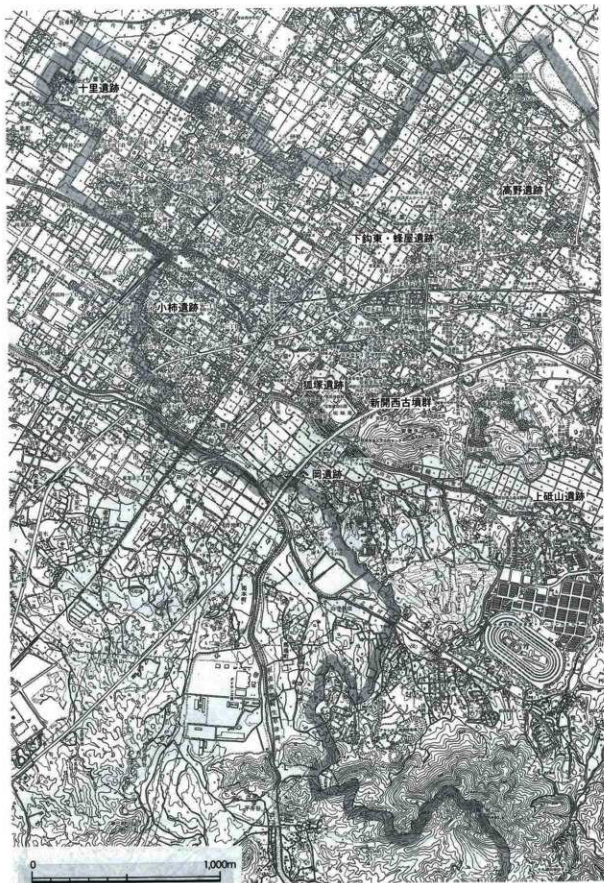
参 加 者: 平井壽一



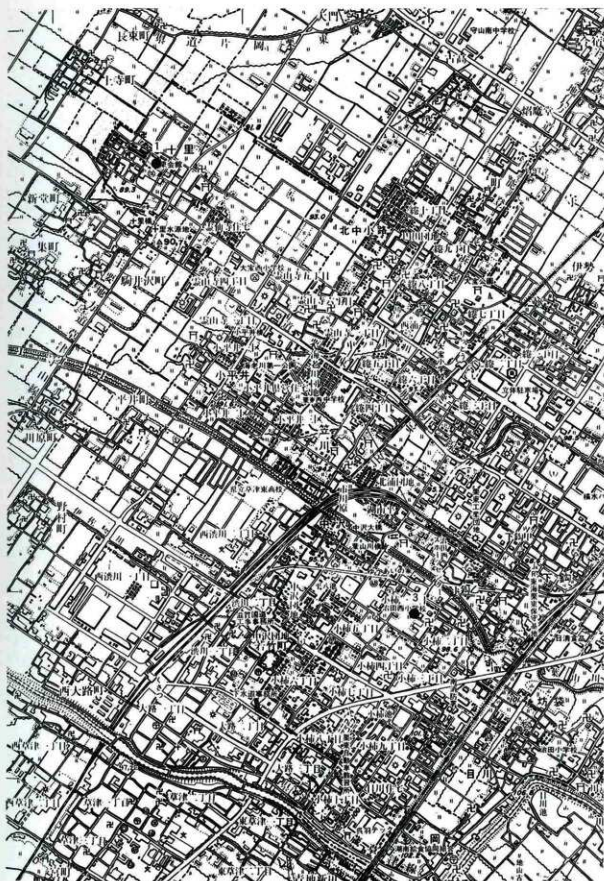
和田11号墳出土玉類

(水晶製切子玉・碧玉製平玉・丸玉)

企画展『古墳時代の装飾品』一玉の美一出品



2002年度 調査遺跡位置図 (S=1 : 40,000)



遺跡位置図① (S=1 : 20,000)



遺跡位置図② (S=1:20,000)

財団法人栗東市文化体育振興事業団 埋蔵文化財調査

受託事業一覧

遺跡名	所在地	調査原因	時期	遺構	遺物	ページ	調査担当
1 十里遺跡	十里397-1他	会館建設	弥生	土坑群、河川、溝、ピット	弥生土器、石器、土鏝	10～13	近藤
2 下鉤東・蜂屋遺跡	下鉤・蜂屋地先	区画整理	弥生、奈良、鎌倉、平安	掘立柱建物、溝、中世墓	弥生土器、須恵器、土師器、陶磁器、黒色土器、骨	14～23	猿向・近藤
3 小柿遺跡	小柿1丁目301-1	宅地造成	弥生、平安、江戸	掘立柱建物、柱穴、溝	弥生土器、石器剥片、炭化木、土坑、土師器、陶器	24～25	雨森
4 狐塚遺跡	川辺81	宅地造成	縄文	柱穴、土坑、集積	縄文土器、サヌカイト原石・配石、石核・剥片、石器	26～28	佐伯
5 岡遺跡	下戸山1540-1他	市営住宅建設	奈良、平安	溝、落ち込み	須恵器、土師器	29	佐伯
6 岡遺跡	下戸山1488-1・1492-1	宅地造成	奈良、平安、鎌倉	掘立柱建物、溝、柱列、土坑	石鏝、須恵器、土師器、瓦、緑釉・灰釉陶器、黒色土器	30～31	佐伯
7 高野遺跡	高野289	保育園建設	古墳、平安、鎌倉	竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑	須恵器、土師器、黒色土器、緑釉・灰釉陶器、石器、鉄器	32～35	雨森・猿向
8 上砥山遺跡	上砥山2486	道路拡幅	平安、鎌倉	柱穴、溝、沼沢地	須恵器、土師器、黒色土器、陶器	36～37	雨森

国庫補助事業 埋蔵文化財調査

国庫補助事業一覧表

遺跡名	所在地	調査原因	時期	遺構	遺物	ページ	調査担当
9 新開西古墳群	安養寺5丁目827-9	個人住宅	古墳（飛鳥）	古墳4基、土坑墓	須恵器、土師器、須恵器棺、金環、鉄器、陶器製露玉	38～43	佐伯・森

① 十里遺跡

調査地 栗東市十里397-1、398-1、399、399-3

調査期間 2002年7月22日～2003年3月20日

調査面積 3,200㎡



調査位置図

十里遺跡は、栗東市の最も北西端に存在する遺跡で、中小河川である横津川の右岸に広がる遺跡である。

過去の調査では、本調査地から東へ約200mいった地点で1991年度に2カ所の調査が行われ、弥生後期から古墳時代初頭の方形周溝墓、河川、土坑などが確認されている。また1998年度には南東約200m先で、飛鳥時代の区画溝、建物などが確認された。溝からは多くの祭祀遺物とともに木簡が出土し注目を集めた。その後2000年度には、本調査地すぐ北～東隣りの調査が行われ、弥生後期から古墳時代前期の河川、溝、土坑約160基が確認されている。

調査の概要

(主要遺構)

弥生時代後期から古墳時代前期と平安時代後期の2時期に大きく分けられる。

弥生時代後期から古墳時代前期の遺構には河川、溝、土坑、梁状遺構などがある。

河川 (SR) は、深さ約1.4m、幅約5～10m、長さ60m強を測り、隣接地の調査を含めると総延長約125m確認できたことになる。ところどころに人工成形した跡がみられ、とくに東端と西端が南に張り出し、浅くテラ



SE 2 周辺作業風景



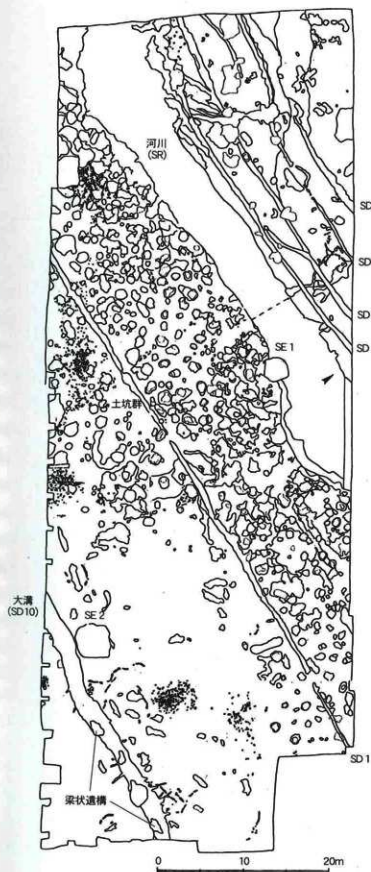
大溝 (SD-10) と梁状遺構



SE 1 黒色土器出土状況



土坑内炭化物と土器



調査地遺構図



SD 5



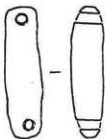
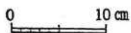
SD 4

SD 3

SD 2



3



4



土坑群 (1~3)
SD 5 (4)

出土遺物実測図

ス状になっている。小溝は、河川に沿って北側に4条(SD2~SD5)、南側に土坑群を挟んで1条(SD1)存在する。幅0.3~1m、深さ10~20cm程度の比較的浅い溝で、場所によっては耕作痕や人間の足跡も確認されている。大溝(SD10)は、調査区南端に存在し、深さ20~30cm、幅約1.5~2.5m、長さ30m強を測る。土坑は、150基以上確認されている。大きさは、0.4~1m、深さ約10~45cmを測る。平面形は、円形、楕円形のものが存在し、埋土中に炭(表面観察からわかるようなものが炭化したものと思われる)が入っている土坑が半数以上認められる。梁状遺構は、大溝(SD10)中の東側に4カ所の土坑が認められ、梁のような役割を果たしていたと考えられる。

平安時代後期の遺構では、井戸(SE)が2基確認されている。河川の中央付近と大溝(SD10)の北側に存在する。前者SE-1は、大きさ2.8×2.8m、深さ1.3mを測り、平面形は隅丸方形である。後者SE-2は、大きさ3.9×4.0m、深さ1.4mを測り、平面形は隅丸方形である。
(出土遺物)

遺物の中心となるのは、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の土器で、甕、鉢、壺、高坏などがある。甕や鉢のなかには、湖南在地の土器に混じって、湖西や湖北など他地域の系統をもつ土器も含まれている。平安時代の遺物では、井戸の底から黒色土器の碗が出土している。土器以外では、石鏃、石匙、石斧があり、大半が縄文時代のもと考えられる。また河川からは、杭、建築部材のほか用途不明の木器が出土している。その他注目すべきものとして、小溝から有孔土錘が出土している。両端に孔をもつタイプで、瀬戸内から大阪周辺にかけてよく見られるものであるが、滋賀県では通常あまり出土しないものである。

最後に土坑群の性格について検討し、まとめとする。

過去の研究成果では、土坑が多数確認されている場合、粘土採掘坑か土坑墓と判断されることが多い。本調査で確認された土坑群は、以下の理由から土坑墓と判断した。粘土採掘坑には、意識的に炭を入れることはないこと、土坑群が存在している場所(河川の南岸に沿って南北約20m強の範囲)が決められていること、土坑の形態、規模、出土遺物の有無、形成の仕方が地区によって差がみられること、さらに出土した土器のなかに、せん孔を持つ壺が出土している点などがあげられる。土坑に炭を入れる例として野洲町小篠原遺跡があるが、脂肪酸分析の結果から土坑墓と判断されている。時期については、弥生後期後半から古墳時代前期(推定2世紀後半~3世紀後半)の約100年間に限られ、推定で1000基以上にのぼると考えられている。十里遺跡と類似している点がいくつかあり参考になる資料である。

150基以上確認された土坑群は、一般大衆(庶民)クラスの墓の集まりと推定され、研究が進んでない当時の埋葬形態などを知るうえで重要である。また土坑墓群の時期は、中心集落である下鈎遺跡、伊勢遺跡、下長遺跡とほぼ同時期であるが、周囲に方形周溝墓は確認されているものの、土坑墓群は確認されていない。とくに下長遺跡は十里遺跡と比較的近距離にあり、土坑墓群を形成した集団との関連が注目される。

(近藤)



土坑断面



調査区東半（南方より）



調査区東半（北方より）



調査区西半（南方より）



調査区西半（北方より）

② 下鉤東・蜂屋遺跡

調査地 栗東市蜂屋(大光寺・柿木立ほか)

調査期間 2002年4月15日～2003年3月28日

調査面積 7,000㎡



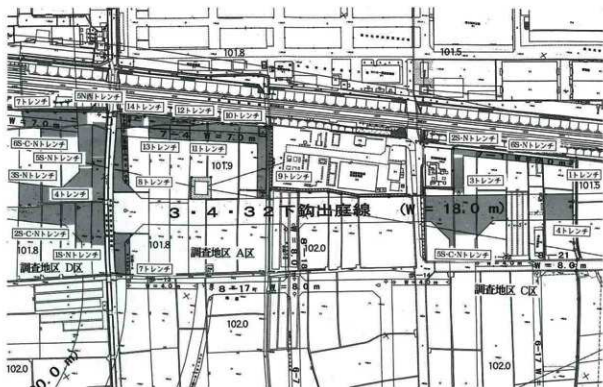
調査位置図

はじめに 今回の調査は、JR東海道新幹線(仮称)びわこ栗東駅前土地区画整理事業に伴う発掘調査である。調査地は二つの遺跡に広がり、その範囲は、概ね北半が蜂屋遺跡、南半が下鉤東遺跡にあたる。

蜂屋遺跡には、白鳳時代創建の蜂屋寺が存在したとの伝承があり、現在でも、坊ノ前、宗寺、経田など「寺」を連想する字名のほか、宿坊があったと伝承される下鉤東遺跡には、大光寺、盆尺寺などの小字名が残っている。

'90年度の調査地では、鎌倉時代の溝から白鳳時代の特徴を持つ軒丸瓦が出土している。昨年度調査では、全容は確認できなかったものの、二重に廻る正南北方向の区画溝やその出土土器や瓦から、一般集落とは違った建物が周囲に存在していた可能性を指摘するにいたった。

また、蜂屋遺跡と西接する野尻遺跡の'88年度の調査地では、今回の調査地より西方50m程で、内区柵列を備えた一辺50m程の古墳時代の豪族居館跡を発見している。



トレンチ配置図 (1:2,500)

このような過去の調査から第2期目となる今回の調査では、豪族居館跡に係わるさらなる関連資料の発見と、蜂屋寺とその周辺の様相の解明が期待された。

調査にあたっては、対象地の小字に合わせ、昨年度調査区B区の北側にC区を、A区の南側にD区の調査区を新たに設定した。また、トレンチは調査の進行状況に合わせ、各調査区ごとに通番で設定した。

層 序 調査地で認められる基本的な層序は、大別すると、次の3層である。上層から、層厚0.3m程の現代耕作土層、層厚0.2～0.4m程の黄灰褐色系砂質土の平安から鎌倉時代初めの中世期の遺物を包含する整地層、そして、北から南へと変化する黄褐色粘質系土層、暗茶褐色系粘土層の堆積土層、灰色系砂礫層の河川氾濫源の地山層である。

主な遺構・遺物 今回検出した遺構には、平安時代初めの農業用水路の大溝や、平安末から鎌倉時代初めの掘立柱建物群の屋敷跡、木

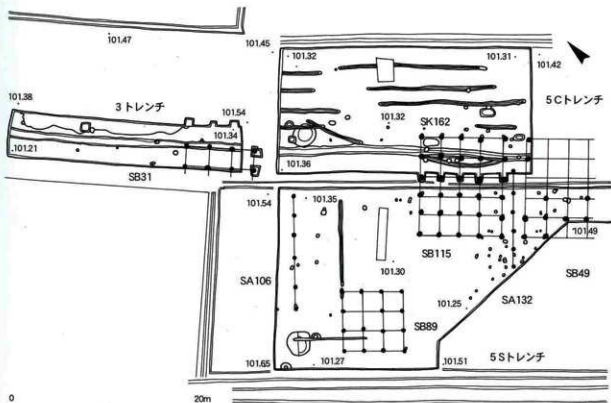
棺墓のほか、土坑・溝の耕作跡などがある。基本的にすべて、黄灰褐色系砂質土の中世包含層を除去した各地山層にて検出した。

各地山層にて検出されたそれぞれの遺構の検出状況は、まさに、調査地周辺の旧地形を物語っている。北半の微高地は居住区として、また、南半はその肥沃な沼沢地跡を耕作地として利用されていたようである。

遺物的には、弥生土器、須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、輸入磁器などの土器類、瓦をはじめ、曲物・木箱・箸などの木製品のほか、骨・種子などの自然遺体が出土した。時期的には、遺構・遺物とも、その中心となるのは、概ね平安～鎌倉時代である。

以下、調査区C区より、調査担当ごとに主な遺構と遺物についてその概要を順次報告することとするが、木製品などの一部の遺物については処理が未了であることから、その詳細については今回は割愛することとする。

(猿向)



C区3・5トレンチ遺構配置図

調査区C区 最も北に位置するC地区では、中世整地層直下の黄褐色粘質土の地山層において、中世期の遺構面を確認した。

検出した遺構には、柵列で仕切られた数棟の掘立柱建物群で構成する鎌倉時代初めの屋敷跡のほか、その北側に拡がる同時期の土坑・溝の耕作跡がある。以下、5トレンチの屋敷跡についてその概要を述べる。

SB115 梁間方向、桁行方向とも柱間距離約2.1m（7尺）を測る5間×4間の南北棟の総柱建物である。SB49と西面する梁間一間分のみ約2.4m（8尺）を測る。柱穴堀方は、長径0.5m、短径0.4m、深さ0.3m程を測る東西方向の長円形である。柱根跡は径約0.2m。

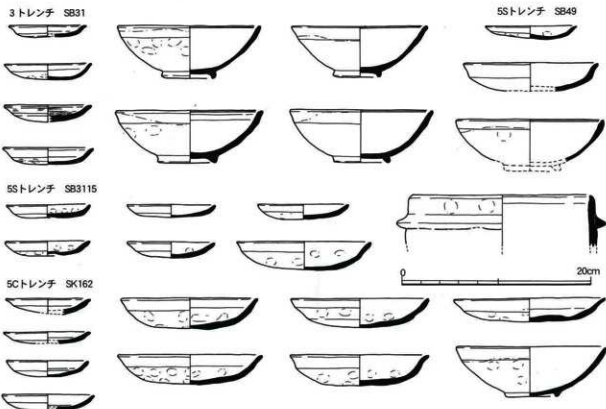
SB49 柵列SA132で、SB115と線対称に位置する5間×3間以上の南北棟の総柱建物である。柱穴規模・柱間距離等の特徴から、SB115と同規模の掘立柱建物と想定される。

SA132 前述2棟の境界となる南北5間を測る柵列。柱間距離は、約1.8～2.4m（6～8尺）と不規則である。

SB89 SB49・SB115から西に位置する3間×3間の総柱建物である。柱間距離は、梁間方向、桁行方向とも約2.1m（7尺）を測る。柱穴堀方は、長辺0.4m、短辺0.3m、深さ0.3m程の東西方向の長円形である。柱根跡は径約0.1m程を測る。前述の2棟よりやや小型の建物である。

SB31（3トレンチ） SB89の北側に位置する3間以上×1間以上の総柱建物である。梁間方向、桁行方向ともその柱穴規模・柱間距離の特徴から、SB115・SB49と同規模の掘立柱建物になる可能性がある。SA106 SB31とそのほかの建物を仕切る柵列。柱間距離は、約2.1～3m（7～10尺）と不規則である。

出土遺物からこの屋敷跡は、概ね13世紀前後頃と考えられる。（猿向）



C区3・5トレンチ出土土器実測図



C区5Nトレンチ南壁土層断面



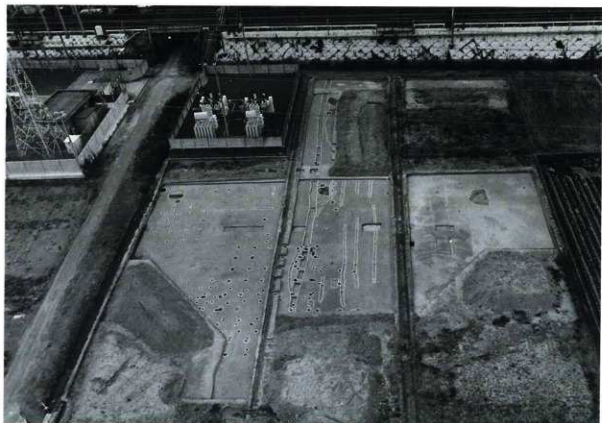
C区4トレンチ完掘状況



C区5SトレンチSB115遺物出土状況



C区5CトレンチSK162遺物出土状況



C区3～5トレンチ完掘状況（南東から）

調査区A区 (A7区)

2001年度調査A6区の南側に位置し、掘立柱建物4棟以上、井戸、耕作痕、溝などが確認されている。掘立柱建物は、A6区で確認されていた建物の続きで、溝で囲まれた3間×3間(約3.2m×3.3m)の建物と、その東にやや主軸を東にずらして3間×3間(約3.2m×3.4m)の建物が重なって存在する。その南側にも3間×1間以上の建物が存在する。その他、中央付近に2間×1間(約2.2m×1.1m)の建物が存在する。井戸は、調査区中央東端に存在し、東端の建物が存在するすぐ東隣りに位置する。検出できたのは約半分であるが、平面形は円形と推定される。規模は現況で、約3.8m×2m以上、深さ約1.2mである。井戸から約2m南東には、耕作に伴う小溝が集中し、居住域は約12m程の狭い範囲が想定される。

(A8区)

2001年度調査A6区の西北側に位置し、土坑、溝、耕作痕、ピットなどが存在する。A6区よりには、1間から2間の柱列もしくは建物が存在する。また調査区中央から西側にかけて、木が生えていたと思われる小穴群や列をなすピット群集中する。

(A9・A10区)

A区の北端に位置し、2001年度調査A1区の西側にあたる。遺構は溝、柱列、土坑などが確認されている。A1区で確認されていた溝の続きが、調査区端にほぼ栗太郎主条里に沿ってのびる。またこの溝と同一方向にのびる溝が約4.5m離れて存在するが、北側(A10区)で西側にやや折れ曲がる。2本の溝の間には、2～3個の柱穴がセットになって柱列が存在し、溝に並行するように折れ曲がる部分においても同一の軸をとっている。土坑はA10区の東側に2基存在し、約3m離れてL字状に配置する。平面形は2基ともに楕円形で、規模は、約2.2m×0.9mと約2.7m×1.2mで、深さはいずれも30cm前後であ

る。性格については不明である。

(A11・A12区)

A区の西端に位置し、A10区の南側に続く。南北方向にのびる小溝群11条と、A11区の西側からA12区にかけて東西方向にのびる小溝群7条が確認されている。溝群が存在する範囲は、東西方向で約15～16mで共通し、いずれも耕作に関連する溝と思われる。またA11区の中央付近からA12区にかけて柱列が認められる。このような柱列は、通常条里の区画(区画溝、耕作痕など)に沿って存在するが、周囲の区画に合わないまったく別の角度によって配置されている。

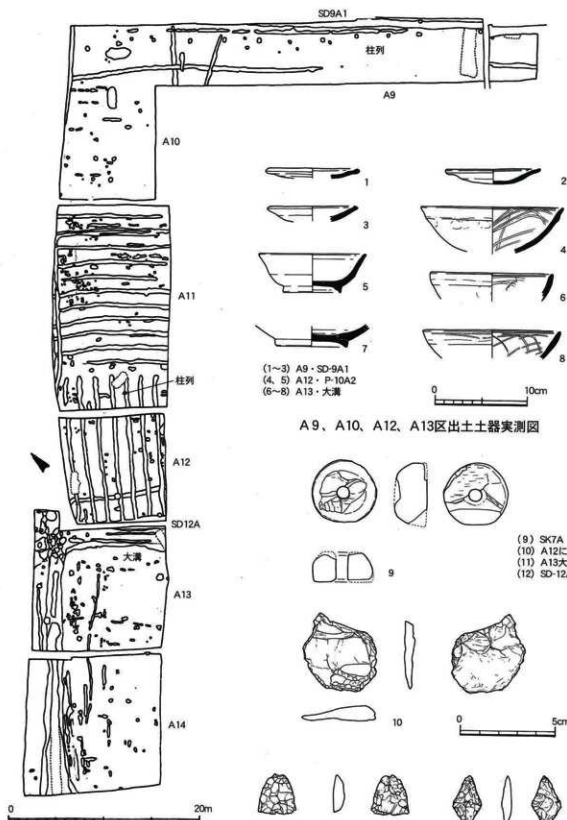
(A13・A14区)

A区の西端に位置し、A12区の南側に続く。2001年度調査A4区で確認されていた大溝の続きと思われる溝がA13区の東端に存在し、北側で西南にほぼ直角に折れ曲がり、A14区にまたがって栗太郎条里方向に沿ってのびる。溝幅は約2～3m前後で、一部A14区の端で4mほどに拡がっている。深さは約35～50cmである。その他、小溝、ピットなどがまばらに存在する。

(出土遺物)

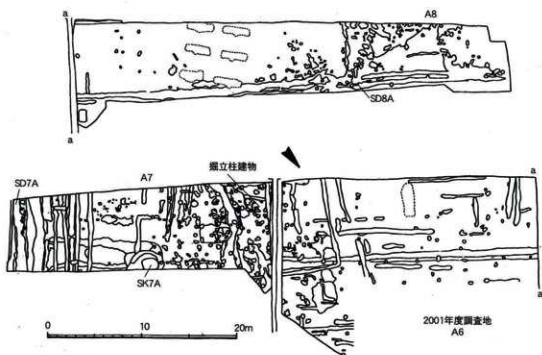
A7～A14区で出土した遺物のほとんどが平安時代後期(11世紀～12世紀後半)の遺物である。黒色土器、土師器を中心に、須恵器、灰軸陶器、緑釉陶器、白磁なども少量出土している。この他では、縄文時代と想定されるサヌカイト製の石器片や、古墳時代の滑石製紡錘車が出土している。滑石製紡錘車は未製品であり、現在同時期の遺構が周囲に確認されておらず、どのような経緯でこの場所にもたされたのか今後の課題である。

A区で確認された居住域はA6、A7区にまたがる一部の範囲で、それ以外のほとんどが生産域と考えられた。興味深い遺構としては、柱列としている2～3個単位で柱穴が並ぶ遺構である。区画に伴う柱列とする考え方もあるが、稲や農作物を干すための構築物の

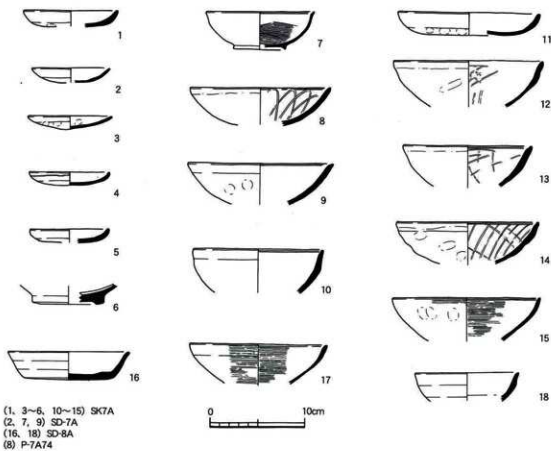


A9 ~ A14区調査地遺構図

石製品実測図



A7・A8区調査地遺構図

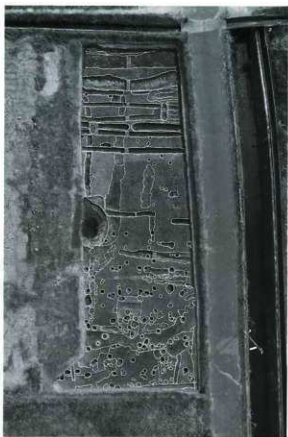


A7・A8区出土土器実測図

柱とする考え方もある。今後類例の検討が必要である。
(近藤)



A7・A8区遺物出土状況 (下: 滑石製紡錘車)



A7区調査地全景 (上空より)



A調査区全景 (上空より)

調査区D区 最も南に位置するD地区では、中世整地層直下で沼沢地堆積土の暗茶褐色粘質土の地山層において遺構面を確認した。

検出した遺構には、平安時代初めの大溝や平安末期から鎌倉時代初めの土坑・溝の耕作跡のほか、鎌倉時代初めの木棺墓がある。

以下、主要遺構についてその概要を述べる。
5N西トレンチS X 72 残存長辺1.8m、短辺0.9m、深さ0.5m程を測る鎌倉時代初めの木棺墓である。0.1m程の暗黒灰色粘土層が墓坑底に堆積しており、その結果、数十枚の土師器皿のほか棺底板と棺枕木、そして葬送儀礼に用いられた曲げ物・木製の小箱・箸がその隙間に遺存していた。

長辺1.6m、短辺0.8m程を測る墓坑底には、短辺方向に長さ80cm、径10cm程の自然木の丸太が棺枕木として利用されている。棺底の板材は、長さ150cm、幅9cm、厚さ5cm程を測る。8枚で構成されていたようである。棺底以外の棺材は遺存しないため不明。

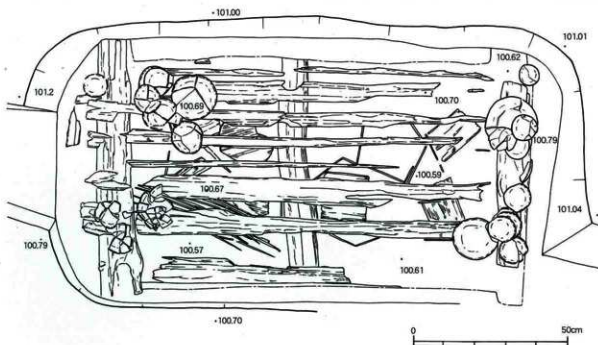
棺底直上からは、土師器皿が棺底四隅にそれぞれまっとって出土した。5～7枚の小皿と1枚の中皿のまとまりをなす。

中央の枕木で仕切られた墓坑底の北側には、一辺16cmの木箱4箱が、南側からは同型の木箱2箱と径15cmの曲物2口と、長さ20cm程の箸10膳程が出土した。

7トレンチS D 73 平安時代初めの用水路。後世の土地改変の削平により遺存状況は悪い。幅1.1m、深さ0.2m程を測る。合流する同一流の5NトレンチS D 71等を合わせると総検出長160m程を測る。

耕作跡 D区全域において大小の耕作跡の土坑や溝を検出した。方位や埋土の違いから、3時期程の重複関係には区別されるものの、規模的・数量的に考えると概ね同様であり、時代的な時間差はないだろう。時代的には、平安時代末から鎌倉時代初め、概ね13世紀前後頃と考えられる。

平安時代初めの用水路S D 71埋没後に構築された木棺墓S X 72は、墓坑の中世整地層中央部がレンズ状に堆積していることから、墓坑はその後も徐々に埋没したようである。この地区では、平安時代初めから鎌倉時代初めにかけての時期において、大きく土地改変が行われたようである。(猿向)



D区5N西トレンチS X 72遺構平面図

まとめ 以上、調査の概要を述べた。最後に若干の整理をおこない終わりとしたい。

(土地区画) 確認できた土坑・溝の耕作跡の広がり、平安時代に成立したとされる条里が、平安時代初めから踏襲され、現在の畦や用水路とほぼ重複して現水田下に残っていることを明らかにした。

(蜂屋寺と豪族居館) 今回の調査では、蜂屋寺、豪族居館跡とも、残念ながらその有機的な関係と想定される遺構・遺物はなく、関連施設存在の可能性を補強する資料を得ることはできなかった。

とはいえ、木棺墓や屋敷跡などの発見は、平安～鎌倉時代の集落が現在の蜂屋集落よりさらに南側に広がることを指摘した。また、住居跡などの遺構検出できなかったものの、弥生時代後期の土器溜まりは、沼沢地で行った人々の営みを想定する必要が生まれた。

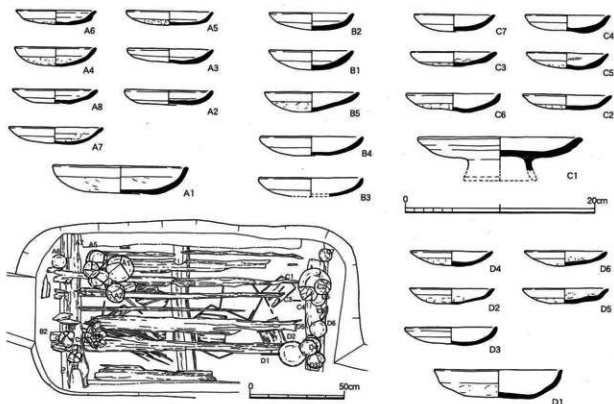
今後の調査でさらなる蜂屋遺跡の様相が、一層明らかになることに期待したい。(猿向)



D区5 N西トレンチ S X 72遺物出土状況



D区5 N西トレンチ S X 72遺物出土状況



D区5 N西トレンチ S X 72出土土器実測図

③ 小柿遺跡

調査地 栗東市小柿1丁目301番1

調査期間 2002年3月18日～4月4日

調査面積 270㎡

小柿遺跡は、六地蔵古琵琶湖層から琵琶湖に流れる葉山川の左岸に位置し、これまでの調査で、縄文時代中期から中世にかけての様々な遺構・遺物が発見されている。特に遺跡西部では弥生時代後期後半から古墳時代初頭にかけての掘立柱建物や竪穴住居が集中して発見されており、集落域を形成していたと考えられる。

今回の調査区は、遺跡西部でも西よりの地点にあたり、弥生時代後期～古墳時代初頭、平安時代後期、近世の遺構・遺物が出土した。弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構には、掘立柱建物2棟以上、柵列、土坑がある。掘立柱建物(SB-1)は3間×1間で、柱穴から受け口状口縁裏細片が出土している。SB-2は3間(2間)×1間であるがSB-1よりも規模は小さい。土坑のうちSK-3は直径0.7×0.8mの楕円形で、検出面からの深さは0.15cmである。後期後半の長頸壺、高坏が出土している。SK-1・2も検出面からの深さは0.1cm程度の、浅いものである。

平安時代後期の遺構は溝のみである。SD-1は幅1.6m、深さ0.4m、SD-2は幅1.3m、深さ0.3mでいずれも平安時代後期の土器が出土している。

近世の遺構には溝、井戸がある。井戸は直径3m、深さ1m以上である。SD-4はやや弧を描く溝で、掘り鉢、染付等が出土している。

今回の調査では、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の集落域がやや密度を薄くしながら西へ広がっていく状況が明らかになった。発見された建物がいずれも掘立柱建物であったことも注目される。

(雨 森)



調査位置図



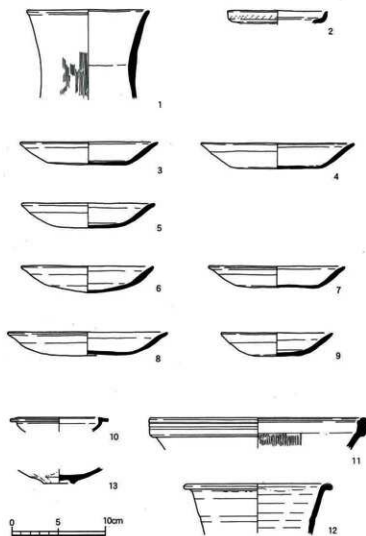
SK-3 土器出土状況



掘立柱建物



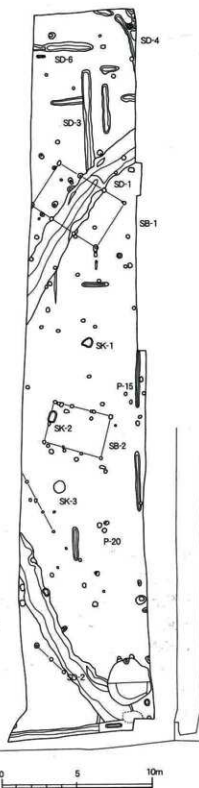
SD-1 遺物出土状況



1, SK-3 2, P-15 3~5, SD-1 6~9, SD-2 10~12, SD-4 13, SD-6



調査区全景



調査地遺構図

④ 狐塚遺跡

調査地 栗東市川辺81

調査期間 2002年7月17日～8月12日

調査面積 258㎡



調査地位置図

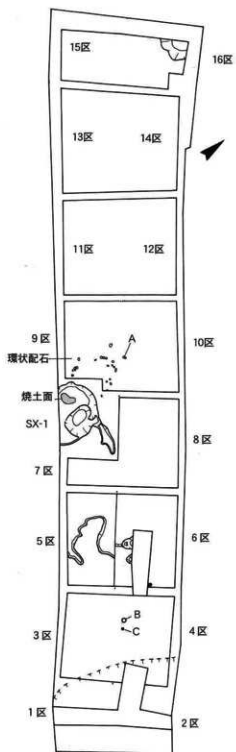
狐塚遺跡は、安養寺山の麓に位置する複合遺跡である。これまでの調査で、縄文時代の集落のほか古墳群、古代から中世の集落などが確認されている。

縄文時代の集落は、1986年の調査で竪穴住居2棟が検出されている。住居のうち1棟には石囲炉があり、炉内から後期初頭の深鉢形土器（中津式）が出土した。今回の調査地は1986年の調査地から250mほど北にあり、狐塚遺跡の北端部付近に位置する。

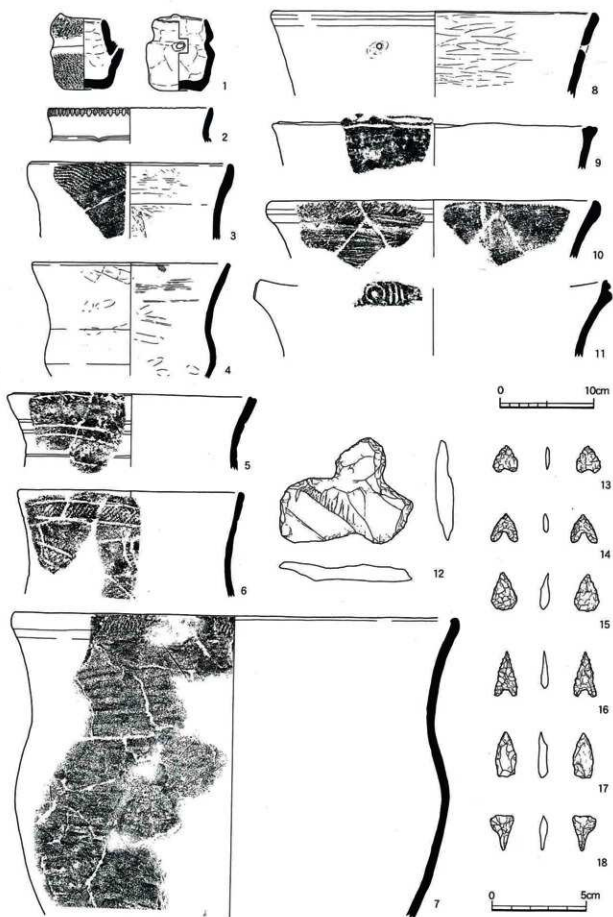
調査では、後期前半（北白川上層式）の深鉢形土器のほか小形の注口土器が出土した。石製品では、サヌカイト製の石鏃（13～16）や石錐（18）のほか石鏃や石匙の未製品（17・12）、3000点を超える石核・剥片が出土した。原石（A）や石核の集積（B）も確認されていて、この調査地が石器の製作地であった事が判明した。

土器類は主に調査区南東端の落ち込みから、石製品は調査区全域から出土した。

遺構は、調査区中央で焼土面のある直径3m、深さ0.3～0.8mの竪穴状の遺構と、それに切られるかたちで直径2mの円形配石遺構を確認した。（佐伯）



調査地遺構図



出土遺物実測図



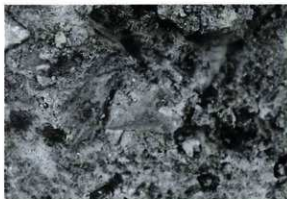
調査地全景



2区 サマカイト出土状況



10区出土 サマカイト原石 (A)



石鏝出土状況



竪穴状遺構と環状配石



竪穴状遺構 完掘状況



4区 サマカイト集石 (B)



4区出土 注口土器 (C)

⑤ 岡遺跡

調査地 栗東市下戸山1540-1ほか

調査期間 2002年9月2日～9月27日

調査面積 1,100㎡



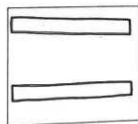
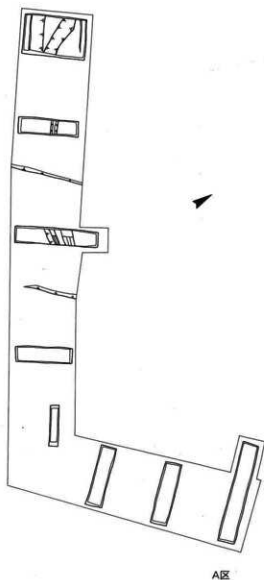
岡遺跡は、沖積平野を望む丘陵地の先端付近に立地する遺跡である。

今年度の調査は市営住宅の建て替えに先立ち実施した。調査地点は栗太郡衙中心部の東側を南北に走る名神高速道路を挟んだ地点であり、小槻大社（式内社）から下戸山古墳（現況52mの円墳、4世紀後半）を経て郡衙へ至る地点であり、古道や古墳群の存在も予想された。

調査の結果、旧市営住宅建設時に遺構面が大きく削平されていて、調査区東側で時期不明の溝および落ち込みを確認するにとどまった。市道を挟んだ北東側調査区（B区）も削平により遺構は確認できなかった。遺物は、土師器と須恵器の小片が出土した。（佐伯）



A区調査風景（後方は下戸山古墳）



調査地遺構図

⑥ 岡遺跡

調査地 栗東市下戸山1488-1ほか
調査期間 2002年6月3日～6月27日
調査面積 400㎡



調査地位置図

岡遺跡は、沖積平野を望む丘陵地の先端付近に立地する遺跡である。1987年度に開始された圃場整備事業に伴う発掘調査では、区画溝に囲まれた大規模な掘立柱建物群が検出され、古代栗太郎衛跡と推定されるに至った。

調査地は栗太郎衛中心部から南東側約300mの地点である。また、南側100mには首長墓である下戸山古墳（現況52mの円墳、4世紀後半）が存在する。

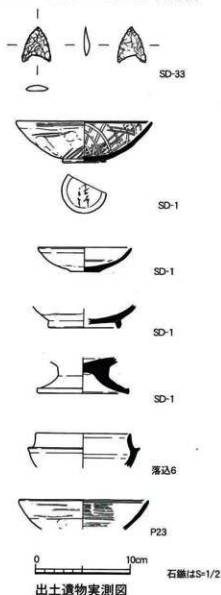
調査地の東隣では、先年度に調査が実施されていて、飛鳥時代から平安時代後期の土坑や溝が確認されていた。

遺構検出面の標高は、南側で109m、北端部で108mを測る。検出した遺構は、平安時代の掘立柱建物（高床式倉庫・柱列）、大溝のほか、時期不明の溝、土坑、掘立柱建物などである。高床式倉庫S B 37の規模は、東西3間（4.5m）、南北2間（3.5m）で、柱穴は最大1mの隅丸方形または不正円形、深さは約0.3m。柱径は0.25mである。S B 50は、5間分の柱列で、調査区北端から検出された。S B 37とほぼ同規模の柱穴で、緑釉陶器の小片が出土した。両建物は、柱穴規模や方位を揃えることから、ほぼ同時期のものと考えられる。

大溝SD 1は、先年度調査で確認された大溝と同一のもので、最大幅4.5m以上、深さ1mで、下層から黒色土器、灰釉陶器が出土した。（佐伯）



調査地南半（背後の墓地は下戸山古墳）



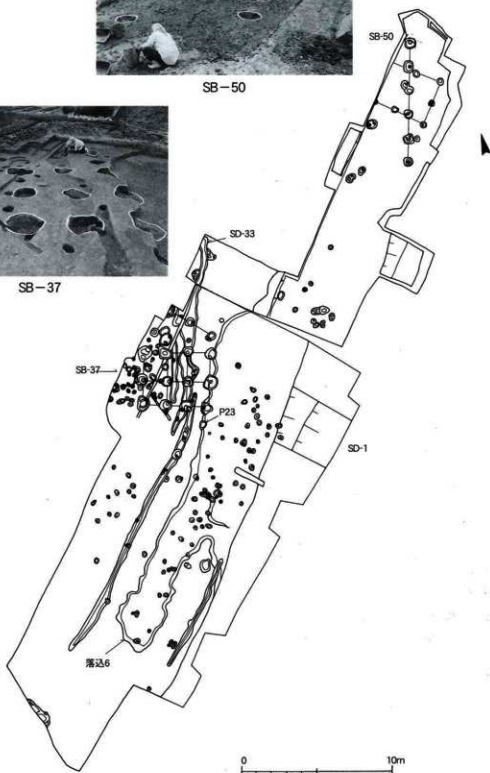
出土遺物実測図



SB-50



SB-37



調査地遺構図

⑦ 高野遺跡

調査地 栗東市高野289

調査期間 2002年11月27日～2003年3月15日

調査面積 1,000㎡



調査地位置図

高野遺跡は野洲川左岸に位置し、縄文時代以降のさまざまな遺構・遺物が発見されている複合遺跡である。とくに古墳時代は、前期を中心に200棟以上の竪穴住居が検出されており、大集落を形成していたと考えられる。今回の調査は栗山保育園建て替えに伴うもので、古墳時代から中世の遺構・遺物が検出された。

古墳時代の遺構には竪穴住居8棟、掘立柱建物4棟以上、土坑がある。このうちSH8はカマドをもつ古墳時代後期のもので、ほかはすべて前期である。

SH1は一辺4mと小規模で、柱穴は1ヶ所のみ、土坑・炉の周縁部は盛り上げている等特殊な構造をもつ。他の住居とは異なる用途でつかわれた可能性が考えられる。

SH3、4は調査区内では比較的規模が大きい住居で、床面が踏みしまり、焼土・炭が大量に堆積している。土坑は南辺中央にある。SH4の床面からは加工痕のある石がまとまって発見された。

掘立柱建物(SB1～4)はいずれも梁行き1間の建物である。棟方位により、SB1とSB5が併存していた可能性がある。SB1、2、5はSH3埋没後かつ古墳時代前期にたてられたと考えられるが、他の竪穴住居との併存関係は明らかではない。

土坑群は調査区中央部分で掘立柱建物・竪穴住居と重複しない場所に多く作られている。埋土は暗褐色で有機物の堆積が考えられる上、多量に出土する土器にも細片が多いため、廃棄土坑であった可能性が高い。

掘立柱建物・竪穴住居・土坑がどのような群構成をとっていたかは、隣接地から発見されている竪穴住居を含め詳細な検討が必要である。

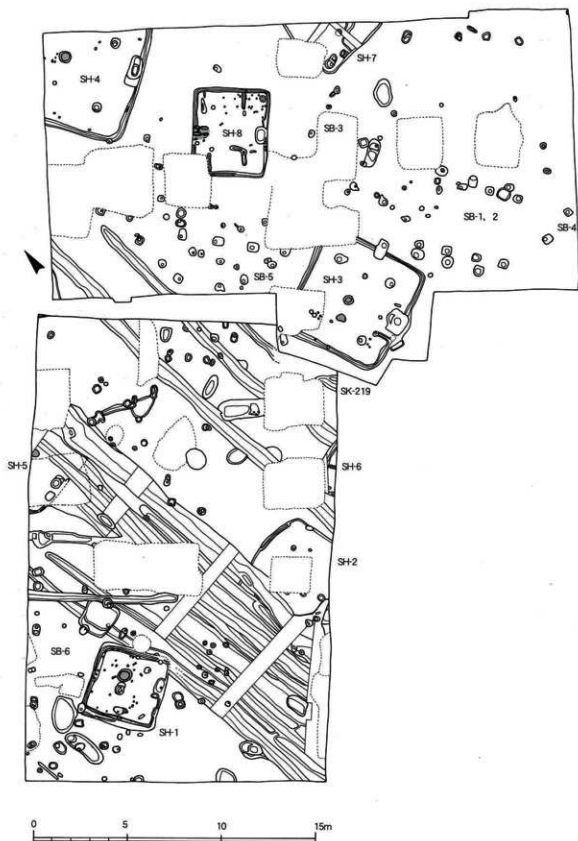
調査区内に南北方向に走る溝からは土師器・黒色土器・灰釉陶器などが出土し、鎌倉時代のものであると考えられる。周辺の調査区では既に平安時代には条里方向の建物群が形成されることと考え合わせると、南北方向の溝は特異であり、方位を規制するような何らかの施設が調査区外にある可能性が考えられる。

南北方向の溝が埋没した後は、条里方向の掘立柱建物が建てられる。建物は4間以上×2間以上のものである。

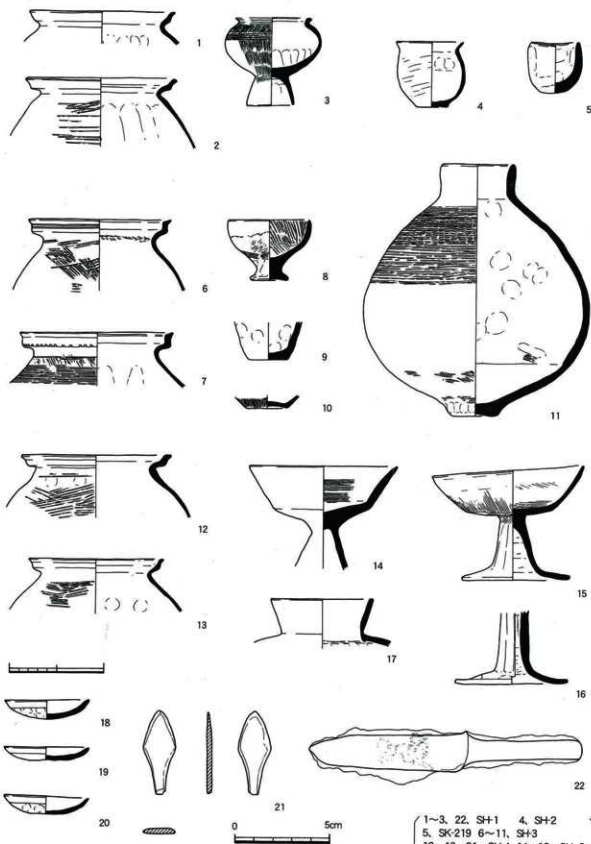
(雨 森)



作業風景 (SH-4)



調査地遺構図



出土遺物実測図



SH-1



SH-3



SH-4



SH-8



調査区北東半部全景



調査区南西半部全景

⑧上砥山遺跡

調査地 栗東市上砥山2486ほか

調査期間 2002年11月21日～2003年2月27日

調査面積 約500㎡

上砥山遺跡は栗東市中部の丘陵地と金勝川との間に広がる谷底平野に位置する。これまでにほ場整備に伴う調査で、古墳時代～中世の遺構・遺物が発見されている。今回の調査区は遺跡の西端部にあたる。隣接する北側丘陵部には龍王古墳が存在する。

出土した遺構は溝、土坑、ピット、沼沢地、流路である。

T-3では南半部で土坑、ピット、流路がみられ、中・北半部では沼沢地上の落ち込みがみられた。特に北端部では層厚0.2mていどの遺物包含層があり、中世の遺物を中心に古墳時代～近世の遺物が出土した。T-2では同様に沼沢地状の堆積がみられたが、遺物は含まれない。さらに北へ向けて沼沢地が深くなっていくことが予想されたため、T-1の掘削は中止した。

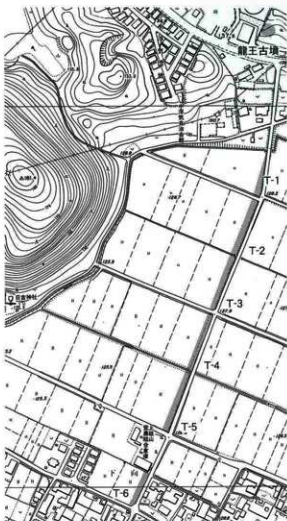
T-4では遺構面がT-3南半部から続き、東西方向の溝が確認された。溝は幅0.8m、深さ0.1mである。トレンチ南端部では攪乱が顕著であった。

T-5ではさらに狭い調査区のため、確認調査を行うにとどめた。ここでは明らかな遺構面は確認されなかった。

T-6では沼沢地状の落ち込み、土坑等が発見された。遺構に伴う遺物はほとんどなかったが、土坑1基には炭の堆積が認められた。

今回の調査は市道拡幅に伴う調査であったため、トレンチ幅は狭いものの広範囲の調査であった。北半部の調査区では概ねが沼沢地状で、遺構はその落ち際から南にかけて広がっていくことが明らかになった。

(雨 森)



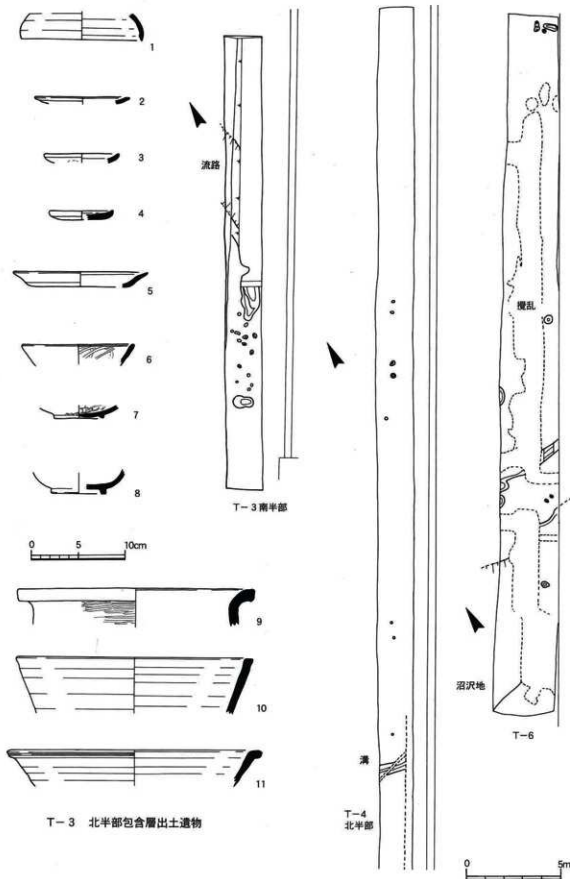
調査位置図 (トレンチ配置図)



T-6作業風景



T-4完掘状況



調査地遺構図および出土遺物実測図

⑨ 新開西古墳群

調査地 栗東市安養寺5丁目827-9

調査期間 2002年10月8日～2003年1月28日

調査面積 600㎡



調査地位位置図

新開西古墳群は、安養寺古墳群の一支群で、今回新たに発見された古墳群である。安養寺古墳群は、独立丘陵安養寺山の北麓から北西麓に分布し、1960（昭和35）年の名神高速道路建設に伴い毛刈古墳、山ノ上古墳、山寺屋敷古墳、新開古墳、下味古墳などの中期古墳が相次いで発掘調査され豊富な副葬品が出土している。

また、山麓から延びる低丘陵部には前方後円墳の大塚越古墳（75m）、椿山古墳（100m）、狐塚3号墳（32m）など中期から後期前半にかけての首長墓群が分布する当地方を代表する古墳群であり、中でも新開1号墳は、甲冑や鏡、初期の馬具一式などの副葬品が出土し、一括で重要文化財に指定されたことで全国的にも著名である。

新開西古墳群は、新開古墳と同一尾根上の南西側斜面に分布している。調査地の標高は116mから120mで、居住地や生産地である湖南地域の平野部から琵琶湖を一望する場所を選地している。

今回発掘調査の対象となった古墳は4基であるが、同一尾根上には、直径21mの新開3号墳が存在するなど、他に数基の古墳が分布している。調査された古墳は、7世紀代に

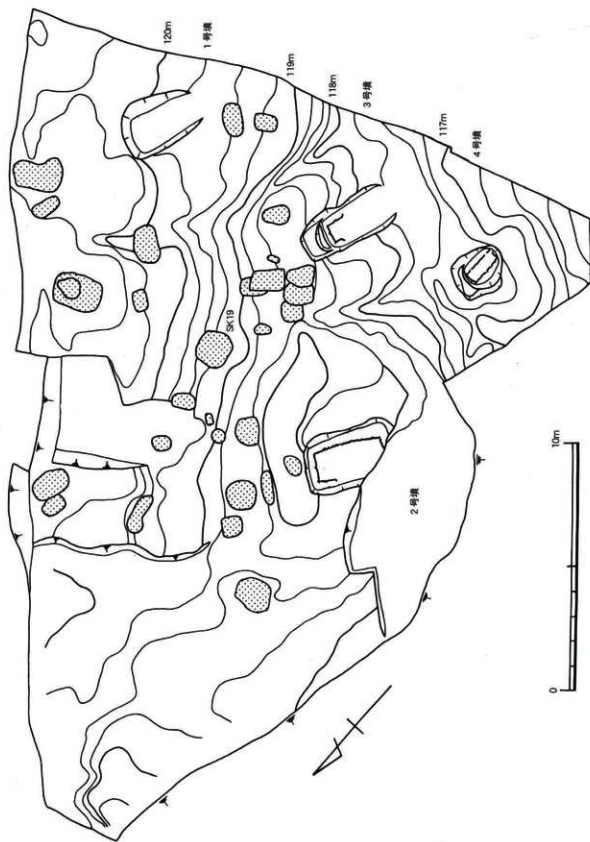
築造された横穴式石室を主体部とする古墳3基（1～3号墳）と小石室を主体部とする古墳1基（4号墳）である。

1号墳は、調査地最高所に築かれている。11×7.5mの方墳である。主体部の横穴式石室は石取りのため破壊されていて、側壁の基礎部1石のみが残存していた。石室の推定規模は幅0.8m、長さ2.8m、無袖で南開口である。須恵器のほか耳環2点が出土した。7世紀中葉の築造である。

2号墳は、推定墳丘規模11m、墳丘形態は判然としなない。主体部の横穴式石室は土取りのため羨道部のすべてと玄室の一部が失われていた。石室規模は奥壁部の幅1.15m、玄室長2.85m、左片袖で南西開口である。玄室床面には粗い礫が敷かれている。須恵器、土師器の他、耳環1点・短刀1点・刀子1点・鉄鍔3点などの金属器が副葬されていた。7世紀前葉に築造され、中・後葉に追葬がおこなわれている。

3号墳は、2号墳の東に周溝を共有し隣接して築かれている。墳丘は一辺約7.5mの方墳である。主体部の横穴式石室は石取りのため破壊されていて、奥壁と側壁の一部が残存していた。石室の規模は、幅0.7m、推定長2.45m、無袖で南開口である。石取り時に破碎されていたが、須恵器製の棺（須恵質有蓋長胴棺）が出土した。棺はカプセル型で、鉢形の蓋を被せるが、身の口縁部には受け部が貼り付けられ、さらに4個の耳が付けられている。横位で使用するため蓋が脱落しないように紐をかけたものとみられる。石室内での出土状況を見ると、蓋を奥壁側に向けて安置し、蓋と身が合わさる部分には精緻な粘土を置き、棺の安定を図っている。

棺の規模は、蓋をして長さ1.1m、胴部の径0.5mであり、石室の規模からみて3号墳は、単独の埋葬を目的に築造されたことが分かる。副葬品は石室外から棺の破片とともに須恵器杯身1点と耳環1点が出土した。また、



新関西古墳群地形測量図 (トーンは土坑群)

石室前底部には、土師器の甕が置かれていた。3号墳周溝からは、奈良から平安時代の土器数点と、陶器製露玉（緑軸緑彩製）が出土した。

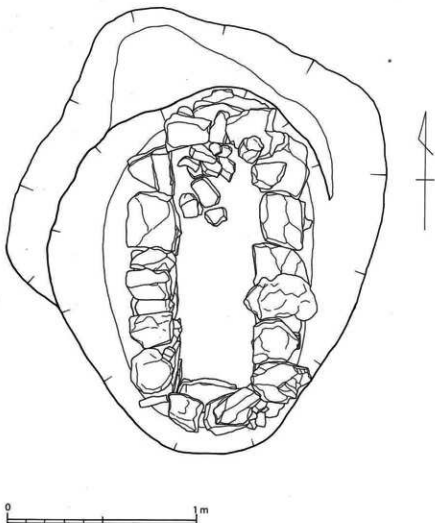
3号墳の築造年代は、須恵器杯身の特徴から7世紀の中葉に求められる。

4号墳は、3号墳の南側斜面に隣接して築かれている。墳丘は不整形で規模は約5m。主体部の石室は、幅0.45m、長さ1.3m、残存高0.5m（3段）である。残りは比較的良好であったが、基底石に比べ2・3段の石材は小ぶりであり、一部が石室内に崩落していた。石室の形態は竪穴状の小石室であるが、南側小口部の石材は他の基底石が深く据えら

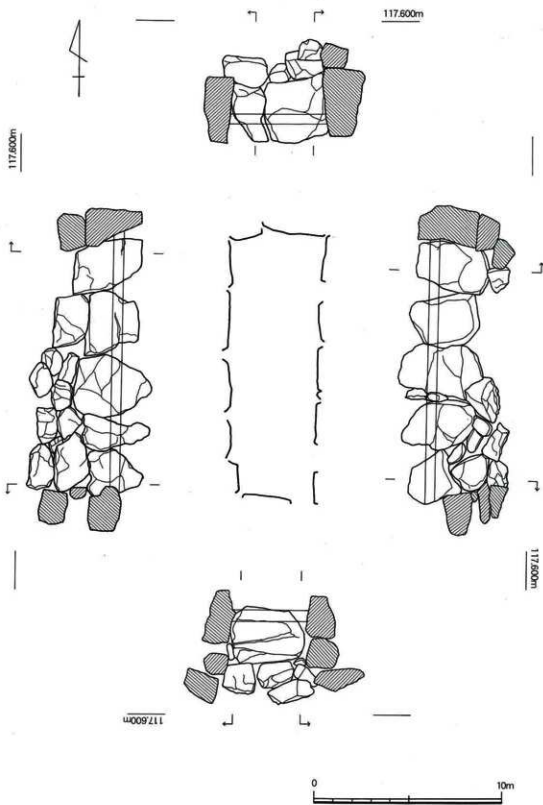
れるのに対し床面の掘り方に置かれた状態であるなど閉塞石に近似し、入り口を意識したものと思われる。また、天井石が存在したか、抜き去られたかは判然としない。石室内から副葬品は出土しなかったが、墳丘封土内から須恵器杯身1点が出土した。石室や須恵器の特徴から3号墳に続いて築造されたことが分かる。

その他、古墳周囲で30基ほどの土坑を確認した。副葬品は皆無であったが、1基から鉄釘が出土したほか、3基から骨が出土し、うち1基の骨は頭蓋骨や歯から人骨と確認できた。

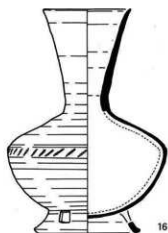
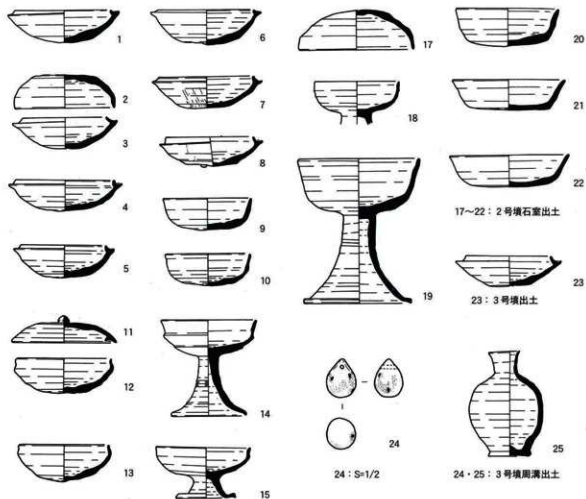
（佐伯）



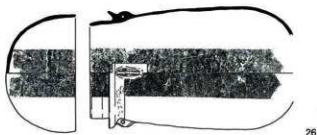
4号墳石室上面実測図



4号填石室立面实测图



1~16: 1号墳石室出土



26: 3号墳石室出土 S=1/16



27: 4号墳墳丘出土





調査地から平野部を望む、手前は名神高速道路



調査地全景



1号墳石室全景



2号墳石室全景



3号墳石室 須恵器出土状況



3号墳全景 奥は4号墳



4号墳全景



土坑19 全景

**栗東市埋蔵文化財調査報告
2002年度 年報**

編集・発行 (財) 栗東市文化体育振興事業団
文化財センター

〒520-3011 滋賀県栗東市下戸山47番地
栗東市出土文化財センター内
TEL 077-553-3359 FAX 077-553-3514

印刷・製本 マルキ印刷株式会社
TEL 077-564-4475

